
Die Heidelberger

2020/2021

ドイツ語学院ハイデルベルク

目次

ドイツ語ラジオ講座と翻訳講座 上田浩二

その時、ドイツで何が起きたのか

— 1990 年から 30 年後 — 新野直弥

アーティストを救え 沢辺ゆり

ボスニアの保護犬マーヤ 是沢正明

留学生のお便り 藤田太郎

市村ひかり

新刊「音読で学ぶドイツ語」 中川純子

中川純子先生の新講座のご案内



ドイツ語翻訳講座

ドイツ語学院ハイデルベルク

学院長 上田浩二

久しぶりに NHK のラジオ講座応用編を担当しています。

かつて 80 年代半ば頃から 15 年ほどテレビやラジオの講座を担当しましたが、さすがにネタ切れ感があって「20 世紀」が終わるとともに引退させてもらいました。ところが、思いがけなくも打診があり、しかもそのコンセプトが魅力的だったのでお引き受けしました。

魅力があったのは、ドイツのアクチュアルな話題（新聞記事や大統領演説）をテキストとする「翻訳」講座の試みだったからです。その点では NHK の担当の方との話し合いはスラスラと進んだのですが、いくつか難関に出くわしました。ドイツの大新聞と連絡を取り実際の記事を使わせてもらう許可をもらおうとしたところ、それは諸般の理由から問題が多くて諦めなければなりません。そこで、ドイツにニュース記事を送っているドイツ人の友人にオリジナルの記事を書いてもらうことにしました。

その次の問題は、どのレベルのドイツ語テキストにするかでした。いかにも外国人向けの「やさしいドイツ語」で書いたテキストでは、なかなか実際のドイツ語の新聞を読めるようにはなりません。記事を読んで理解するためには、それを書くひとの目の着けどころを読み取り、マスコミでしばしば使われる言いまわし、ドイツ社会に関する背景知識などが必要になります。放送を聞いてくださる方々のこうした面での多少の負担軽減のために、記事の対象を日本のリスナーが知っている（あるいは想像がつく）テーマに絞り、ドイツ語表現も何度か書き換えてもらいました。

ハイデルベルクで私が担当しているのは、もっぱら翻訳講座です。現在は毎週 1 回ずつ、入門、基礎、中級、プロ養成の 4 講座を担当しています。そこでは、中・高の英語教育で習ったような、あるいは大学の第 2 語学のような「その場で訳す」（いわゆる「訳読」）ではなく、前もって訳を提出してもらう形をとっていて、内容がスッパリ伝わり、誰が読んでも読み間違えることのない完成度の高い日本語訳を目指しています。どんなに語学的に正しくても、日本語の方で問題になる訳もあります。例えば、「大きな木立に囲まれた家」という表現は、どういうことでしょうか。「大きな木立に囲まれた / 家」なのか「大きな / 木立に囲まれた家」なのかどちらにも取れます。

また読みやすさや重点の置き方の面から考えてみましょう。ある文を訳すにあたって、ほぼ同じ内容の二つ

の訳が考えられます。「彼女は、いつも通りかかる小さなブティックで見るからに欲しくなるようなアクセサリーを見つけた」という訳がひとつ。あるいは、「いつも通りかかる小さなブティックで彼女が見つけたのは、見るからに欲しくなるようなアクセサリーだった」という訳も考えられます。この二つは、どう違うのでしょうか。どちらの方が、ずっと分かるでしょう。この例は、「原文」を後ろから訳しあがるタイプと、出てくる順に素直に視点や焦点を移して訳すタイプの典型的な違いです。

もっとも、そこまで来るより前に、いわゆる文法知識、慣用的な表現、場合によっては背景知識がどうしても必要です。これら全体を引っくるめて初めて文が「わかる」のです。そのうえで、今度はこうした原文に特有な語順や表現を、普通に用いられる完成度の高い日本語にするには、どのような日本語にするか決めるわけです。ときどき「訳すって、日本語の作文の勉強なのかな」と思うこともあります。

訳すということの特徴を別な方面から考えて見ましょう。「会話」は、なによりも時間にきつく縛られます。聞いてすぐに（だいたい）分かって、ただちに返答したり問い返したりしなければなりません。このため内容を十分に考えるだけの余裕はありません。その点、翻訳は時と場所にさほど縛れません。そのためにドイツ語の母語話者がそこにいなくてもできます。そして、知らない単語や言いまわしが出てきたら、調べる時間の余裕もあります。そのおかげで、聞くよりもずっと広くて深い話に触れられるわけです。その結果、先ほどの例のように日本語を考え、日本語の表現力を高める練習にもなります。

それが、翻訳です。

皆さんも試みてみませんか。

●まいにちドイツ語（応用編）

環境問題、ライフスタイル、現代史などドイツの今を切り取ったジャーナリスティックなオリジナルテキストが満載。3 か月目は、シュタインマイヤー大統領がコロナ感染症に関して国民に呼びかけた演説を扱います。

この翻訳講座（24 回）は来年の 4 月～7 月に再放送される予定です。



その時、ドイツで何が起きたのか — 1990 年から 30 年後 —

ドイツ語学院ハイデルベルク

在デュッセルドルフ

同窓会会長 新野直弥

2020 年 12 月 14 日

まず冒頭に、新型コロナウイルスに罹患なさった方がお近くにいらしたら、心よりお見舞い申し上げます。1 日も早く快復なさるよう、ハイデルベルク学院職員一同、そして遠く離れた在独のハイデルベルク同窓会からも心より祈念致します。

さて、「誰もが想像しえなかった出来事」と言えば、30 年前ならドイツ統一であった。1990 年に東西ドイツが統合した歴史的な「快挙」は、其の後のソビエト連邦の崩壊と相まって、従来の西欧対東欧という単純な対立の図式から一旦は東西融合へと向かい、その後の世界のパワーバランスにも大きな影響を与える出来事であった。

それから 30 年後にあたる 2020 年、「誰もが想像しえなかった出来事」とは、言わずもがな当地ドイツにおいても新型コロナウイルス（以下、COVID-19 と略）である。COVID-19 が発生しなければ今年のドイツでは盛大に統一が祝われ、30 周年記念行事がポツダムを中心に催行された筈であり、計画より 9 年遅れでやっと竣工にこぎつけたベルリン・ブランデンブルク国際空港が図らずも花を添えたところであった。しかし当然ながら記念式典は中止、今年 2 回目のロックダウンという最悪のタイミングでフライトも大幅に減便された国際空港は、発着ロビーも閑散とした寂しい開港となる。一方で、元々閉鎖が予定されていたテーゲル空港は市民に惜しまれながら 11 月 8 日に歴史を閉じたが、同空港も東西冷戦下、旧ソ連によるベルリン封鎖に対し突貫工事で建設されたのであるから、歴史の皮肉としか言いようがない。日本でも様々な報道がされたと思うが、ここでは時系列で、欧州とその中心ドイツでは統合後 30 年後「その時、何が起きたのか」を追ってみたい。

・1月時点では、欧州でも COVID-19 は中国出張者や中国の旅行者の一部で感染者がみられる程度であった。まだ“COVID-19”という名称も付けられておらず、実態は殆どが未解明であったが、感染者との「濃厚接触者」が感染する確率が高い、

と一般的には知られる程度であった。

・2月になると、中国以外にも韓国で複数の感染者が発生し始めた事実が報道されるが MARS（中東呼吸器症候群）の 20% の致死率に比較すれば、新型コロナウイルスは低いとの認識で、欧州ではまだ危機感が薄かった。この間にも武漢など中国からの団体旅行客がイタリアに入国していた。（イタリアの国立がん研究所によると、新型コロナウイルスが既に昨年 9 月にイタリア国内で漸次拡散していたとする研究結果を発表したので、武漢で爆発的に大流行する以前から、実はイタリアで拡散していた事になる）ただ、この時点では、これから長く続く事になる COVID-19 禍がこれほど深刻化するとは予想されていなかった。

・3月には、オーストリアのスキースキーリゾート地イシュグル Ischgl で経営されているバーのウェイトレスが体調不良にも拘らずサービスを続け、一部のドイツ人スキー客を中心に感染が拡大した事実があった。

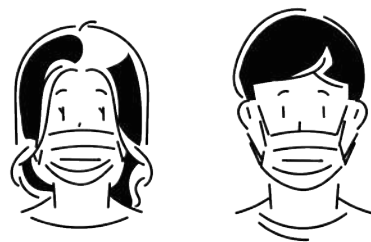


しかし当初は認識されておらず、後日になってチロル地方一帯に端を発する流行が米国やアジアの一部などの観光客数千人にも拡大する一因となった。ドイツの一般市民の危機感が初旬の時点では強くなかったにも拘らず 筆者が知合いの日本人医師から聞いた所では、ドイツ各地の大病院では既に感染症対策が練られ、本来は感染症治療にはあたらぬ麻酔医ですら治療の応援に当たるような 院内体制が取られたり、集中治療室がコロナ患者用に優先的に回されるようになったり、医療従事者に対する研修が実施されたりしている。13 日、世界保健機構 WHO の会見で、イタリアを中心とする欧州内の感染拡大が世界の流行の中心地になったとの発表を受け、状況は一転する。メルケル首相と各州首相による協議が行われ、各州ごとの措置が矢継ぎ早に施行され



た。16 日以降、例えばデュッセルドルフの位置するノルトライン - ヴェストファーレン州（以下、NRW 州）では、全ての遊興施設（バー、ディスコ、カラオケ等）と文化施設（劇場、映画館、美術館、博物館等）の閉鎖が決定された。17 日からレストランも 18 時閉店となり、その週から企業では在宅勤務が推奨される。更に翌々週、23 日からは、僅か 3 人以上の集会禁止令も発令される。レストラン（持ち帰りやケータリングのみ許可）や美容室は閉店、食料品店や薬局、ガソリンスタンド、クリーニング店だけが営業を許される。銀行も営業を許可されてはいるものの、開店しているのは本店のみで、支店は閉店したままである。2020 年 3 月の出来事は一生、忘れる事ができないであろう。普段は日本人含め外国人やドイツ人の往来で賑やかな Immermann 通りですら、人影がほぼ皆無になるという、まるで戦時下体制のような光景となる。更に数日も経たない内に、戦後ドイツでは想像し得ない出来事が起きた。根拠のない買占め騒動に惑わされた一部消費者によって、トイレットペーパーが争って買い占められたのである。この騒動を打ち消すため、一斉増産に励むメーカーを TV のニュースは報じている。興味深い事に、各国によって買占められた商品は異なり、パスタがなくなった国、ワインが売り切れた国などもある。消費者の不安心理をよく示す事件である。この品薄状態が解消するのに、ドイツでも 1 カ月程かかっている。25 日、英国ではチャールズ皇太子が（軽症ではあるが）感染が確認されている。実は 4 月に息子のウィリアム王子も陽性だったと半年以上も経過した 11 月になって報道されているが、「国民を不安にさせたくなかった」との由。英国政界でも感染が相次ぐ。27 日にはジョンソン首相自身がコロナに感染、1 週間自主隔離したものの、その後容体が悪化、4 月 5 日には集中治療室に入り、

3 日間の酸素吸入を受けた。治療に当たった医師らが首相の死亡を発表する覚悟もしていたことが明らかになっている。同時進行で閣僚も次々と感染しており、感染拡大への対応に懸念が強まった。因みに 11 月 15 日にもジョンソン首相は自主隔離しているが、これは陽性結果に基づくものではなく、感染者との接触を理由としている。ドイツも例外ではなく、メルケル首相が感染者と接触したとして（担当医師が COVID-19 に感染していたことが発覚）自主隔離し、その後の検査で陰性が確認されたと報道がされている。一方、EU 各国で EU 圏外からの入国規制が導入されたり、非常事態宣言や外出禁止令が出るようになる。第一次ロックダウンである。特に南欧では爆発的な流行が顕在化しており、スペインでは非常事態宣言が発令される。スペインの高齢者施設で入居者が置き去りにされるケースや、イタリアのベルガモでは遺体安置所や火葬場への移送や処理が間に合わず、軍隊が投入され、霊柩車ではなく 軍用トラックが隊列をなして棺を近隣都市に搬送するという、まるでホラー映画さながらの光景が連日、TV で放映。又、発症者が搬入される病院でも感染症対策のノウハウが徹底されておらず、不十分な医療体制で院内感染が拡大、医療従事者の感染者が続出する。イタリアの死者が 1 万人を超過、スペインも 7300 人を超過した。しかしながら、この時点に至っても、EU ではマスクの着用義務はない。もしマスクが普及していればその後の感染拡大は一定、抑制されていた事は疑う余地がない。



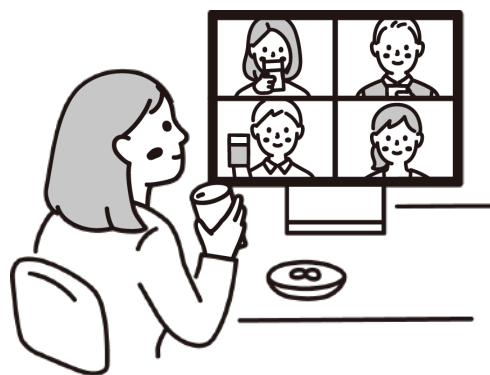
・ 4 月 6 日、ドイツへの入国或いは帰国者に対し 14 日間の自宅隔離措置が導入。緊急の渡航理由がない限り、短期滞在や旅行は認められなくなる。この頃になると、当地の対策も進んでくる。9 日、感染が疑われる場合は病院に行ってはならず、かかりつけ医、又は家庭医（Hausarzt）に相談する事になっているが、自治体毎にホットラインも設置される。感染者が急増して家庭医に接続できない場合に備え、コロナ以外の相談ができる全国共通の医療相談ダイヤルも開通する。集中治療用病

床も 28,000 から 40,000 床まで増床される。後日、ドイツ全国で義務化されるマスクの着用も、実はドイツで最初に義務化したのは旧西ドイツではなく、旧東独の小さな大学町イエナである。地方都市、或いは郡ごとに集計を取ると、南ドイツやNRW州の一部都市を中心に旧西ドイツ各地でクラスターが発生しているものの、どういう訳か旧東独のイエナは感染者ゼロが続いた。調べてみるとマスク着用を義務化しているとわかる。それから各州では急速にマスクの効用が見直され、着用の義務化が進む。27 日、最後まで残ったNRW州でも遂に着用が義務化され、全国規模となった。その途端、当然ながらマスクの品薄による価格高騰や売切れという事態に陥り、中国からの緊急輸入に迫り込まれたのは日本と同様である。在独日系企業の中には、止むを得ずに日本本社から航空便で社員向けにマスクを調達した会社も複数、ある。つまり医療先進国のドイツと言えども最初から万全の備えであった訳ではなく、マスク対策では完全に後手に回ったのである。(ドイツのみならず、欧州では従来、マスクの効用が認知されておらず、日常で着用する習慣は全くなかった。とりわけ南欧では着用に対する心理的な抵抗が根強く、この状況が秋まで続く。一方、ドイツでは政府が在宅勤務の権利保護法案を検討。ただ前述の通り、主な企業では 3 月 17 日から既に在宅勤務体制が取られており、実質上法案化したと言える。home-office が進んでいるドイツや北欧では、法案化に抵抗が少ない。

5 月に入り、ロックダウンの効果が見え始め、徐々に規制緩和の方向に向かう。11 日から飲食業の再開が認められるが、最大 2 世帯まで同じテーブルで食事が可能に。但し、入店時に来店客には手指の消毒が義務付けられ、全ての来店客の氏名・連絡先を記録し、4 週間保管する義務や来店客の入れ替りの際にテーブルの消毒も店側に課せられる。18 日からは国内居住者に限り、ホテル宿泊が認められる。

6 月 16 日、感染の連鎖を断ち切る目的のコロナ警告アプリ Corona-Warn-App. が連邦政府より発表され、ダウンロード可能となる。日本人でも利用可能であるし、英語の説明もあるが、日本人の利用者は少ない。この頃、NRW州内のギュータースロー郡の精肉工場で集団感染が発生、原因を探ると東欧からの出稼ぎ労働者を低賃金、長時間、か

つ劣悪な労働環境で就労させていた実態が暴かれる。工場従業員 7000 名のみならず、隣接のヴァーレンドルフ郡の住民にも予防目的の自宅隔離が実施される一大事件に発展する。これらの集団感染により折角落ち着いていた基本再生産数(1 人の感染者が 2 次感染させる平均的な人数を示す指数、以下 R と略)が 2.88 に急上昇し、感染が収まっている州と比較すると、州が異なるだけで感染率や R に顕著な差が出る。同じドイツ国内でありながらリスク地域と見做される地域から入域すれば、外国のリスク地域からの入国に準じる制限を設ける州が次々と現れる。(注: ドイツは連邦制であり、大綱は連邦政府が決定しても、細目は各州政府の判断に依る内容で施行されるのが一般) この制限はドイツ人にとっても複雑で、必要に応じて最新情報を得なければならない。例えばリスク地域から州を越境して入域する他地域の者には宿泊を認めないヘッセン州やザールラント州、バイエルン州、リスク地域に滞在した者には 14 日間の自宅隔離を課すラインラント・プファルツ州がその例となった。北海に休暇に行ったNRW州のドイツ人が休暇途中で宿泊を断られ、帰省せざるを得ない事態も起きている。



7 月の休暇時期を迎えた欧州では、国内で休暇を取得するよう国民に呼びかける国がある一方で、南欧では観光客誘致に熱心であった。欧州圏内の空路も再開される。例年よりは少ないものの、一定数の越境休暇観光客がいて、各国によってまちまちなマスク着用義務の元、又、夏季休暇中の気の緩みもあり、感染が再び増加傾向になる。

8 月に入ると、感染の第 2 波が指摘される。例えばドイツでは、医師労組が第 1 波よりも第 2 波の方が感染拡大は深刻化するであろうと警告している。1 日から、ドイツではリスク地域に限らず全

ての入国・帰国者に対する任意の無料検査が導入され、空港や主要駅の到着時に、或いは 72 時間以内であれば最寄りの保健所や指定病院でも無料で検査が受けられる体制となる。これに加え、8 日よりリスク地域からの帰国者には PCR 検査が義務化される。但し検査費用は無料。又、各州でドライブスルー形式の検査場も出てくる。ハンバーガー店よろしく、迅速に検査結果が判明する。又、バイエルン州では早い時期より、市民には検査を無料化している。以降、ドイツの新規感染者数が次第に増加していくのは、これら検査体制の充実の為ではないかと推測される。感染者増にも拘らず、この時点では病床のひっ迫には至らない。12 日には各州では、公共の場でのマスク着用義務違反者に対する反則金が即時に課せられるように変更される。(NRW 州では 150 ユーロ、ヘッセン州では 50 ユーロ) 従来はマスク着用の求めに応じない場合のみ、反則金が課せられた。



9 月には、NRW 州内の学校では授業中のマスク着用義務から解放されたものの、他方ドイツ在留邦人には殆ど発生していないとされていた感染者が日本人学校内で始めて判明する。インターナショナルの幼稚園の日本人父兄でも感染が判明した。

10 月に入ると、リスク地域が徐々にベルギー全域、ルクセンブルク全域、フランス全域まで拡大。これら地域からの入域に際し、14 日間の隔離義務が課せられる。ドイツにおいても感染拡大傾向が続き、学校でも再度、マスク着用が義務となる。「AHA」ルール(=1.5 メートルの対人間隔確保 Abstand halten, 保健衛生措置 Hygienemassnahmen 及び日常マスクの着用 Alltagsmaskentragen)の遵守が政府より繰り返し宣伝される。バイエルン州では、基準値によって制限を強化する「コロナ信号」が採用される。つまり緑、黄、赤、深紅色になるに従い、地域で適用される制限措置が厳しくなる。ベルヒテスガーデン郡、次いでロツタルイン郡でも、自治体とし

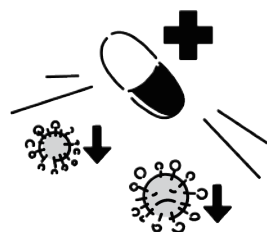
て初めてロックダウンが導入される程、感染が悪化し、観光客が退去するように求められた。(従来は、国として導入していた) 上記の対策が取られても、新規感染者が過去最多となり、2 万人を超過する。



11 月 2 日、第二回のロックダウン(部分ロックダウン或いはミニ・ロックダウンとも呼称)が導入される。国によっては更に厳しく、フランスは外出制限を、スペインは非常事態宣言を発令。バイエルン州とバーデン＝ヴュルテンベルク州では、ドイツ国外リスク地域からの入国・帰国に際して、所在追跡票 Aussteigekarte の提出が求められるようになる。6 日、フランスでは 1 日当たりの感染者が過去最多の 58,046 人を記録、ドイツも同様 21,506 人となる。9 日、アメリカの製薬大手ファイザーとドイツのバイオ医薬品会社ビオンテックの両社が開発をしたワクチンが臨床試験で 90% 以上の有効性が初期分析結果で認められた、との発表がある。素晴らしい朗報ではあるが、マイナス 70 度での輸送や保管、有効期限などの諸問題を解決する必要も認識され、各国での接種体制も課題となる。26 日、既に 2 日から導入されているロックダウンが 12 月 20 日まで延長決定。

12 月、遂にドイツでも感染者の累計が 100 万人に達した。依然として感染者は増加中であり、予断を許さない。本稿を執筆中の 14 日時点

でも、一旦 20 日まで延長された外出制限が早くとも 1 月 10 日まで再延長された。営業が許されていた小売店も、食料品や生活必需品の店のみに限定された。公共の場での大晦日の花火打上げも禁止である。最後に、EU 域内では比較的感染防止に成功してきたドイツから、日本が学べることを書



き留めたい。

・新型コロナウイルスの流行前から国内の大学病院等ではICU 集中治療室などの設備が整っており、収容可能患者数は最大 5,900 人程度である。今回の新型コロナウイルスの流行を予想していた訳ではないが、Pandemic が発生した場合でも一定、対応可能な医療体制を備えていたと指摘できる。医療先進国と言える日本でも、集団感染対策は取り組みべき問題と強く感じる。

・NRW 州では中央駅前にコロナテストセンターを設置し、有料ではあるが、誰もが PCR 検査を受けることができる。(教職員や介護施設職員などは無料)

・ドライブスルー方式で PCR 検査を受ける大規模なセンターがあるが、バイエルン州では住民全員が無料で検査を受けられる。NRW 州では医師と電話で相談し感染の疑いがあると診断されれば、無料で受けられる。勿論、各地ハブ空港では入国者・帰国者対象に無料で検査を受けられる。

・ワクチン接種については州によって態勢が異なるが、ベルリンでは接種センターが コンサートアリーナ、競技場、見本市会場等に複数、建設されている。NRW 州でもメッセ会場を改装して接種できる仕様に工事中である。

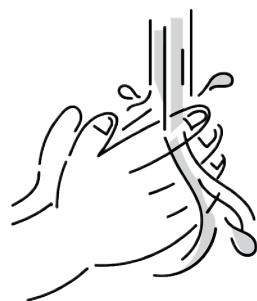
以上のような体制をとっていても第二波は防げず、夏に一時的に緩和した結果、秋以降感染が拡大する要因になったと指摘できる。早ければ今月中にも一部で接種可能となるワクチンも 10% 程は効果がない訳であるし、重症化を防ぐことはできても他者への感染防止には効果がないとされており、ワクチンに過大な期待をしたり、気を緩めてはならないと再認識できる。

他方、欧州でも日本に見習うべき点は幾つもあった。既に日本では習慣として定着しているマスク、帰宅後の手洗い、握手をしない、咳エチケット等は早期の時点で欧州でも導入すべきだったろう。以上、本年 12 月 14 日までの COVID-19 禍を振り返ってみた。

Heidelberg への寄稿の依頼を受けた際、年に一度発行の学校新聞であるし年末でもあるが故に楽しい話題の方が相応しいか、とも悩みましたが、欧州で目の当たりにした新型コロナウイルスの感染状況を実地に見聞した卒業生として、後世に記録を 遺すのも意義ある事、使命の一つではないかと思った次第です。

来年に入り Pandemic が終息するとの楽観的な見

方は全くできませんし、” コロナ不況 ” の影響は 2 年は残るとの分析もあります。With Corona の時代にあっても、どうやって希望を失わずに前向きに生きていくのか、一緒に考えていきましょう。コロナ禍でも、当地ドイツでは語学学校を立ち上げたいという日独カップルもいます。頑張ってドイツ語を勉強していきましょう。気を引き締めながらも、どうぞ楽しい年末と新年をお迎え下さい。最後までお付き合い頂き、ありがとうございました。



アーティストを救え

沢辺ゆり（フランクフルト在住）

2020-09-26 付 ドイツ時事ニュースのブログ
「アマガエルのドイツ便り」から /
<https://doitsudayori.blogspot.com/>

新聞の地方版に、小さい記事を見つけた。「フランクフルトとヘッセン州では、観客がコロナ危機にある劇場を支援」（9月15日付 Frankfurter Allgemeine 紙）という見出しである。なんでも、私の住むフランクフルトをはじめとするヘッセン州都市の劇場やオペラ座、コンサートホールでは、思いがけず多くの観客が、コロナで上演中止となったプログラムの前売り券の払い戻しを求めずにその金額を寄付した、というのである。フランクフルトのオペラ座などは、払い戻しをしなくてすんだ金額が11万ユーロ以上に上り、大変助かったらしい。ヘッセン州全体では、払い戻しを要求してこなかった客が全体の約3分の2と、多数派であったということだ。また、各劇場やホールの年間会員（あらかじめ一年間に予定されている複数の演目のチケットを一括して購入して希望の座席を早めに押さえておきたい常連客用のサービス）も、多くの演目が中止になったり人数制限で入場できないにもかかわらず、今年の契約を解約してくる客はほとんどいないということで、危機に際して大々的に寄付を募らねばならないと考えていた劇場がとりあえず今はその必要がなくなった、と喜んでいることも伝えられていた。だがその一方では、フランクフルトでもここ最近、常連客に支えられてきた伝統あるナイトクラブ（芸人のトークやジャズ、ソウル、ブルースなどのライブ演奏を聴きながら、酒やおしゃべりを楽しむクラブ）が、コロナのせいで次々閉店に追い込まれているとの寂しいニュースが続いている。アーティストたちに活動場所を提供する側もイベントを主催する側も等しくコロナには苦しんでいるわけだが、それ以上に、活動ができずに収入がほぼゼロになった自由業のアーティストたちの窮状はいかば

かりか。今回は、特にこの自由業のアーティストを救うためにドイツの連邦政府や州政府がこれまで一体どういう策を取ってきたのか、そしてドイツのアーティストたちが実際に公的支援にどこまで救われているのかを調べてみることにした。

ドイツでコロナ感染を抑えるための全国的なロックダウンが行われたのは3月半ばから5月半ばまでの二か月間であったが、この間、すべてのイベントが中止された。この二か月間、観客の前で活動するアーティストたちはその場を失い、同時に収入を失ったのである。この期間、連邦政府はまず自営業や中小企業を対象に経済支援策を取り、彼らが何とか持ちこたえられるよう大きく四つの措置を実行している。①即時支援金給付：従業員5人以下の企業体には3か月間で最大9000ユーロの経費負担、6人以上10人以下の企業体には3か月間で最大15000ユーロの経費負担（これは現在でも3か月ごとに申請可）、②従業員給与の一部補償：休職、もしくは勤務時間の短縮に追い込まれた従業員の手取り給与を、最初の3か月間は60%（扶養児童がいる場合は67%）国が補償する。期間が長びくにつれ補償額は増える（最長で12か月間支給）、③家賃の滞納許可：2020年4月～6月分に関しては、会社や店舗の賃貸料払いが滞納しても大家側からすぐには解約できないよう、臨時ルールを導入、④融資条件の緩和：公的融資機関による融資条件を大きく緩和。国はまずは以上4つの措置を実行することで、自営業者や中小企業経営者を救い、倒産や従業員解雇を防ごうとしたわけだ。だがこれらはすべて企業体に対する支援策であり、イベント会社やコンサートホールなどの経営会社、店舗はこれら救済策の対象となっても、個人で自由な活動をしてきたアーティストはこの対象から漏れ落ちている。上記①の支援金は自由業アーティストも対象になってはいるが、ここで援助されるのは営業活動に必

要な「経費」でありアーティスト自身の生活費ではない。結局のところ、3月時点で国が自由業のアーティストを対象にして行った救済策は唯一、「3月15日までに契約されていた出演がコロナのせいで流れた場合、出演料の40～60%（契約された金額により異なる）を国が補償する」というものだけであった。

このように当初は国の救済策が整わなかったため、ロックダウンが始まりすべてのイベントが中止されるや、特に個人で活動していたミュージシャンたちはジャンルを問わず自助努力を強いられることになった。彼らはインターネット配信による有料のストリーミング・コンサート（インターネット接続の動画・音声配信アプリを利用したコンサート）で個人のスタジオや自宅から、同じく自宅にいる視聴者に演奏を届け、少しでも収入を得ようと努め始める。これは世界的な動きであったが、ドイツでも3月中に、演奏家たちにストリーミング・コンサートの出演を斡旋するプラットフォームが多く立ち上げられている。一方でドイツのアーティストたちは署名運動を開始し、自由業アーティストに対する支援策を見直して改善するよう求める手紙を連邦政府及び各州政府に書き送った。「われわれにとっての『経費』とは、われわれの生活費のことだ」との文章で彼らが具体的に要求したのは、コロナのせいで収入を失い生活が困難になったアーティスト各人にとりあえず毎月1000ユーロ程度の生活費を支給することである。また彼らのこの要求を後押しするために、公益法人ドイツ文化理事会（Deutscher Kulturrat）も、連邦と州に、共同で自由業アーティストのための非常時支援基金を創設するよう求めた。このドイツ文化理事会というのは、いわばドイツ国内のあらゆる文化・芸術・メディア関連団体の上部組織であり、政治からは独立した団体であるが、EU政府やドイツ連邦政府、州政府、地方自治体の文化政策に、芸術・表現・言論の自由を守る立場から助言するという役割を担っている。

これらの要求を受けてようやく、まずは州単位での動きが活発になってくる。早い州では4月に、遅い州でも5月にはまずは期限を三か月に切って、アーティストたちへの月額1000ユーロ前後の「生活費」支給を始めている。その後7月に入っ

たところでようやく連邦文化省も、国レベルのアーティスト救済プログラム作りに取り組み始めた。“文化の新スタート”プログラムと名付けられたのがそれだ。なんでも総額10億ユーロを文化・芸術・メディアのあらゆる分野におけるコロナ財政支援に充てるということで、分野ごとに細かい支援内容のプログラムができています。前述のドイツ文化理事会が求めた支援基金もこの中で実現されており、文化、芸術の各分野ごとに基金が作られ、国から総額5000万ユーロがこれらの基金に流れ込む。この基金から直接アーティスト各人への支援金給付がなされるということだが、ミュージシャンを例にとれば、音楽基金に“奨学金”を申請し受理されれば各人に毎月の生活費支援1000ユーロが半年分、合計6000ユーロ支給される、とある。これで自由業のアーティストたちもひとまずは生活保護を申請せずともよくなり、来年の年明けぐらいまでは最低の生活費が保証されたと言える。一方で、ロックダウンの二か月が過ぎた後の彼らの活動の場はどうなっているかというと、6月に入って以降はコロナ感染者数の増加状況を見ながら各州がそれぞれ条件を付けて、コンサート会場や劇場、映画館などの解禁を始めている。ただし現在9月末時点でも、入場を許可する観客数は屋内であればまだ100人以下に制限されているケースが多い。劇場やコンサートホール、映画館にしても平均して座席総数の20～25%しか入場券を売らない状況にあるということだ。屋外に関しては8月末に連邦政府が、今年いっぱい1000人以上のイベントの全面禁止を決定した。従ってアーティストたちの活動の場はいまだに大きく制限されている。ただ、コロナ禍の最初の半年でドイツの州政府も連邦政府も自由業アーティストを支援する必要性を認識したのであるから、来年も困難な状況が続くようであればまた適切な支援策が延長、採択されるであろうと信じたい。「ドイツが本当に“文化国家”なのかどうかは、この危機の後に判明する」（作曲家ゴードン・カンペ氏）のである。

ここフランクフルトは、欧州中央銀行（ECB：European Central Bank）の所在地でもある。2014年にECBはマイン川沿いに巨大な新ビルを完成させ、街の中心部からマイン河畔に移転してきたのだが、その後毎年8月末のある一日の夕べ、

ヘッセン放送交響楽団と共同でこのマイン河畔での大規模な野外コンサート Europa Open Air を主催している。この日、川岸には交響楽団用の大きな仮設舞台が作られる。コンサートは第一部と第二部に分かれ、20 時からの後半第二部はヘッセン放送交響楽団によるオーケストラ演奏になるが、毎年の私のお気に入りには 18 時から始まる第一部のジャズ演奏だ。8 月の 18 時はまだ昼間の明るさで、マイン河畔の広大なグレンデには 20000 人もの市民が音楽を求めてやってくる。入場は無料、飲食も可能、どうぞ思い思いに音楽を楽しんでくださいというのがこのコンサートの趣旨であり、仮設舞台の正面に並べられた座席スペースは開演 1 時間前からすでにいっぱいになるが、ここの座席に座っている人は全体のごく一部に過ぎない。背後の土手にピクニックシートを広げる人々、マイン川対岸にも風に乗って切れ切れに聞こえてくる音に耳を傾けている人々がいる。川沿いのアパートのベランダや窓際にたたずむ人々、マインに架かった近くの橋の欄干に身をもたせて耳を澄ます人々もいる。そして座席はなくとも、舞台の周囲に立って思い思いに体を揺らしながらトランペットの音色に聞き入る人々。仮設舞台の向こうには川を悠々と周航する遊覧船が見え、その背後には高層ビルのスカイラインが見える。少しずつ日が傾き周囲は夕暮れの色に染まっていき、涼しい風がマインの川面を渡っていく。この景色の中に自分が一人いて音楽がある。だが同時に、こんなにも多くの人々と同じ音楽、同じ時間を共有している喜びもここにはあるのだ。それは、こういうひとときのために私たちは生きているのではないだろうかと思える時間なのである。この Europa Open Air も今年は中止になってしまったことが、私にとっては今までのドイツのコロナ禍で最も寂しいことであった。

沢辺さんのドイツ時事ニュースのブログ「アマガエルのドイツ便り」からご寄稿いただきました。沢辺さんはこのブログの他にも、東京外国語大学大学院ドイツ語科に所属している美濃部遊（みのべ ゆう）氏の提案で、ブログから取り上げたテーマを、お二人の「おしゃべり」の形でそのテーマ

を深掘り、あるいはそのテーマからタテ・ヨコ・ナナメに話を広げていく Podcast の配信も最近始められました。Podcast とは、インターネット上で音声データを公開するもので、ドイツでは若い世代を中心に大変広まっていてニュースやトーク番組、料理番組、語学学習、その他さまざまなエンターテインメントに使われております。日本でも若い世代を中心に、今後広まっていくであろうことが予想されています。Podcast のタイトルは「ドイツのメディアから」です。お 2 人のトークはとても楽しく、またドイツ事情を知るのに役立つと思いますので、ブログと併せて是非 Podcast（下記いずれかのリンク先から）もお聞きください。

<https://anchor.fm/doitsumedia>

<https://podcasts.apple.com/jp/podcast/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E3%81%AE%E3%83%A1%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%81%8B%E3%82%89/id1543543129>

<https://open.spotify.com/show/3NXcbnGARsvhSv81thIjoq?si=qj6-RjjwQvSRml0KbaswWA>



ボスニアの保護犬マーヤ

是沢正明

ボスニア戦争後のサラエボには野良犬が至る所で徘徊していた。その多くは動物シェルターで保護されるか、不妊手術や去勢手術後、再び放たれていた。中には里親が見つかるまでボランティア家庭で飼われ、欧州のネットワークを通じてEU諸国へ配送されている犬もいる。

子供の頃犬を飼いたがっていた娘は、孫と共にティアハイムと称するドイツの動物保護施設で探していた。しかし、気に入った犬がいなかったため、ネットで探して見つけたのが、ボスニアの保護犬マーヤだった。

ドイツで動物を飼うには動物保護のための特別規定に従わなくてはならない。特徴的な制度としては、犬の飼い主が払う犬税が挙げられる。額は各自治体によって異なるが、ベルリンでは年間120ユーロである。またドイツには動物保護を目的として設立された保護団体が多く、中でも動物保護連盟は欧州最大の団体である。傘下には、16州の団体と700超の動物保護協会が加盟しており、当該協会には500以上のティアハイム（動物保護施設）や数十万人以上の会員が含まれる。保護犬を飼う際には、動物保護団体の質問に回答し、訪問調査、つまり犬を飼うための条件が揃っているかどうか調べられる。

検査を無事終えた娘家族は、マーヤを心待ちにしていたが、当時コロナウイルスによる国境封鎖のため三ヶ月ほど待つこととなった。

令和2年7月24日早朝、30匹の保護犬を積んだ2台の車がミュンヘンに向けて出発した。夜中の2時にミュンヘン到着後、同地に滞在していたドレスデン在住の里親が、自身の保護犬とマーヤを連れて帰路についた。

ミュンヘン到着の連絡を受けた娘夫婦は、ドレスデンの里親と事前に決めていたサービスエリアへ向った。早朝7時にマーヤを受取り、ベルリンへ向かったマーヤは、後部座席で道中静かに娘の膝に頭を乗せて爆睡したそうだ。

ベルリン到着後、マーヤは子供たちから大歓迎され、早速ソファでお腹を出してくつろいだ。

マーヤが来て10日後、孫たちと一緒に欧州最大の動物公園（Tierpark）に行った。ここはリードを付ければ犬も入園できる。過去にリードを外した犬がハイエナの柵を越えて対峙したところ、足を食いちぎられ、安楽死させられた事件があった。初めてヒョウを見たマーヤは、後ずさりしながら吠えていた。

今では毎週金曜日に近くのドッグランへ連れて行ってもらい、週末は時々我々と一緒に、散歩を兼ねて欧州最大のドッグランで遊んでいる。ここには湖があるので、犬も泳ぐことができる。

娘家族に可愛がられ成長していく一歳のマーヤ、今後は孫たちと一緒に趣味のカメラに納める楽しみが増えた今日この頃である。（在独43年）



是沢さんのプロフィール：日本で電子工学を学んだ後、ハイデルベルク大学に留学。その後、1981年～1990年まで旧東ドイツで東洋エンジニアリングの通訳を担当する。1991年にICH GmbHをベルリンに設立。日独の企業向けにジェットロ等の依頼を受け、政策調査やコンサルティング業務を行なう。www.ichgmbh.com

留学生のお便り



「マインツでの学生生活（コロナと自炊と BioNTech）」

2020 年 10 月渡独 現在マインツ在住

藤田太郎



今年の秋までハイデルベルグでお世話になりました、藤田太郎と申します。現在はマインツ大学の経済学修士課程に在籍しています。僭越ではありますが、この場をお借りして、現在のマインツでの暮らしや大学の授業について、簡単にお話させて頂ければと思います。



マインツを流れるライン川

夏場以降は新型コロナウイルスの感染が落ち着いていたドイツでしたが、私が渡独した 10 月下旬頃から急速に感染者が増え始め、11 月の初めから部分的なロックダウンに入りました。私が在学しているマインツ大学でも、当面の間は殆どの授業がオンラインで実施されることになりました。

思い描いていたものとはかけ離れた留学生活のスタートとなりましたが、多くのお店や市役所は通常通り営業しているため、生活を立ち上げる上で大きな苦労はありませんでした。携帯電話の契約の際は、強面（コワモテ）のお兄さんに早口のドイツ語でいろいろと質問されましたが、ハイデルベルグで会話の練習を積んでいたこともあり、なんとか乗り切ることができました。料理が壊滅的に苦手な私にとって、レストランでの飲

食ができず自炊を余儀なくされているのは非常に不便ですが、「Bitte schneiden Sie das Rindfleisch in Stücke. (牛肉を細かく切ってください)」や「Wie lange ist das haltbar? (どれくらい日持ちしますか?)」等、こうした状況でなければ絶対に使うことはなかったであろうフレーズを使用する機会が増えたと、前向きに捉えるようにしています。

様々な制約があるもともと、大学の授業もきちんと機能しています。例えば、大学の授業もきちんと機能しているドイツ語の授業では、授業中に学生がパワーポイントの資料を作成して発表したり、興味のあるテーマに関するプレゼンを自宅で録画してアップロードする宿題が出されたり等、オンライン授業ならではの学習方法が取り入れられています。また、慣れない言語で授業を受けている身としては、よくわからなかった箇所の録画を見返して復習することができるのも非常に便利です。アクシデントもしばしば発生しますが（先生の Bluetooth イヤホンが壊れて生徒の質問が届かない、朝早い授業でカメラをオフにし忘れた生徒のモーニングルーティンが生中継される等）、総じてみれば、勉強の効率は対面での授業と比べても遜色ないものだと感じています。



グーテンベルク博物館の活版印刷体験。

ルネサンスの三大発明の一つである活版印刷術を発明したグーテンベルグはマインツで生まれました。

このように、コロナ禍の中でも、とても刺激的で充実したドイツ生活を送っております。とはいえ、ブンデスリーガの試合を生で観戦したり、ヨーロッパを自由に

旅行したり、クラスメートとビールを飲みに行ったりできないのは、やはり残念です。11月のある日、早く以前の日常が戻らないものかとぼんやり考えながらテレビでニュース番組をみていたところ、私の住んでいるマインツが大々的に報道されていることに気が付きました。調べてみると、マインツにある BioNTech という医薬企業が開発するワクチンで良好な臨床結果が得られたことから、世界的に同企業とマインツに注目が集まっていることが分かりました。この BioNTech のニュースは、ドイツの医療分野における技術力の高さを示す事例として、また、(同社の創業者がトルコ系移民であることから) ドイツ社会の多様性・バイタリティを示す事例として、ドイツ、特にマインツの人々は誇らしく思っているようです。



マインツ大聖堂（ドイツ三大聖堂だそうです）の前にて。

その後、その他の製薬会社のワクチン開発についても前向きな進展がみられ、ようやくこの混乱も終わりがみえてきたように感じます。ワクチンが広く行き渡るまで、少なくともこの年末年始は家にいる時間が長くなるかとは思いますが、在宅時間を有効活用し、勉強（および自炊スキルの向上）に勤しみたいと思います。ハイデルベルグの皆様も、様々なご苦労があるかと存じますが、どうかご健康にはお気を付けてお過ごしください。日本に帰国した際、またご訪問させて頂くのを楽しみにしています。

Frohe Weihnachten und ein gutes Neues Jahr !



フライブルク音楽大学 修士課程 ピアノ科在学中
Hochschule für Musik Freiburg
市村ひかり



私は現在、ドイツはフライブルクにて音楽留学をしています。かの有名な榎本大進さんを生み出した学校、フライブルク音楽大学の修士課程、ピアノ科に在籍中です。2020年10月の冬ゼメスターから入学して、現在3ヶ月ほど経過したところです。数ヶ月しか経っていないのにも関わらず、教授に多くの本番の機会を頂き、また日本からオンラインコンサートの依頼を受けたり、音楽面で充実した生活を送っています。コロナ禍での留学ということで、街の様子や状況をこの記事で少しお伝え出来ればと思います。



コロナ禍での留学ですので、受験、渡航手続きなどが想像以上に大変でイレギュラーなことの連続でした。また11月からのロックダウンが12月も延長され、学校での規則も変わっていく中で臨機応変さを常に求められている気がします。もちろん今年はクリスマスマーケットが中止ですし、レストランやカフェも開いていないので、去年 Vorspiel（受験の準備のために教授のレッスンを受ける事です）で訪れたときより、街の雰囲気はやや暗い印象があります。授業は殆どがオンラインで行われ、学校での練習は生徒同士が接触する事を避ける制度が施行され、換気も定期的にするよう促されています。本来多くのコンサートが行われるはずの時期ですが、中止や延期も相次いでいます。できたとしても観客20人まで（ホールの広さによる）など、

またフライブルクは学生の街と言われるほど大学、学生が多いです。フライブルクの学生であれば、フライブルク大学のドイツ語の授業も半額ほどで受けられることを知り、今ゼメスターはその授業を取り、自ら話せるような努力を重ねています。15 分程度のパワーポイントを使ったプレゼンを課せられていたり、テーマについてディスカッションをしたり、音楽だけでなく学生の街ならではの学び方をしているのもとても意味を感じています。私は B1 までドイツ語学院ハイデルベルクでお世話になりましたが、そこではドイツ語を定期的に話す事、考える事、知らない言葉に触れ続けることの大切さを学びました。なのでドイツに来てもよりよいコミュニケーションを取れるよう、今後も授業を受け、語学の勉強には力を入れ続けたいと思っています。3ヶ月の留学の途中経過ではありますが、かなりの成長を感じているというのが私の感想です。生活に慣れることは大変ですが、音楽を学ぶ上で、また人間的な

中川純子先生の新設クラスのご案内

2021 年冬学期に新設するクラスをご紹介します。日本人の苦手な発音を「音読で学ぶドイツ語」の著者の中川先生が担当されるクラスです。日時につきましては別途ホームページ又は校内掲示をご覧ください。

***初めてのドイツ語（発音編）90 分 ×8**

ドイツ語を初めて学ぶ方、または始めて間もない方を対象にしたクラスです。発音は学習の始めにしっかり意識することがとても大切です。本講座では音読を通じてドイツ語の発音を学びます。日本語とドイツ語では音の出し方は大きく異なっています。まずは今まで無意識に発音していた日本語の音について、自分がどのように発音しているのか自覚し、意識して出せるようにします。

授業ではまず単語の発音から始めます。パン、チーズ、ハムなどはドイツでは対面で買うことが多いです。きちんと発音できればお買い物が楽しくなります！バスのチケット、電車のチケットなどを購入するときには地名を正しく発音できなければなりません。観光地の名前など、行ってみたいドイツの地名を発音してみましょう。

コミュニケーションには単語の発音だけではなく、文になった時のメロディがとても大きな役割を果たします。アクセントやイントネーションが異なるだけで、意味がすっかり変わってしまうこともあります。日本でも馴染みのある、ドイツ民謡の歌詞などの短い一節の音読を通じてドイツ語特有のリズムやイントネーションにも親しめるようにします。自信を持って発話し、コミュニケーションを楽しめるよう、初めから正しい発音を身につけましょう！

- 1 ドイツ語の発音の特徴：音と文字の対応
- 2 ドイツ語らしい音を出す：母音と子音
- 3 ドイツの詩を読む：意味のまとまりを理解する
- 4 ドイツの詩を読む：イントネーションを意識する
- 5 物語を読む：意味を理解する
- 6 物語を読む：文アクセントとイントネーションを意識する
- 7 物語を読む：伝えたい情報を意識する
- 8 物語を読む：聞き手を意識する

***音読で学ぶドイツ語（90 分 ×8）**

本講座はドイツ語を一通り勉強したけれど、実践的な表現をもっと学びたい、文法を復習しながら基礎を固めたい、単語を覚えたいけれどただ暗記するのは苦手、という学習者の方を対象にしています。テキストには『音読で学ぶドイツ語』を使用します。このテキストでは 1200 の基本語彙が 155 の例文にできるだけ重複しないように入っています。本テキストの例文を学びながら、文法の基礎を固めると同時に、日常会話に必要な実践的表現を身につけることを目指します。また独検3級の対策として、過去の問題なども適宜扱っていきます。

*****新刊のご紹介*****

「音読で学ぶドイツ語」

中川純子先生

1200の語彙と初級文法が身につく厳選フレーズ集

本書はドイツ語を初めて学ぶ方、一通り勉強したけれど実践的な表現をもっと学びたい、文法を復習しながら基礎を固めたい、単語を覚えたいけれどただ暗記するのは苦手、という学習者の皆さんのために編纂されました。各ユニットには基本語彙1200ができるだけ重複しないように入っているので効率的に単語を覚えることができます。表現が自然に口から出てくるまで繰り返し発音してみてください。

特徴

- ✓ 155のユニットに約1200語の基本語彙と初級に必要な文法を凝縮しました。
- ✓ 各ユニットはドイツ語例文、その例文で使われた単語・表現の解説、日本語訳から成っています。
- ✓ ドイツ語例文は自然な表現なので、そのまま日常会話にも役立ちます。
- ✓ 学習者が間違いやすいポイントや知っておくと役に立つ知識を丁寧に解説しました。
- ✓ 活用表も見出語の直後に置き、文法とともに学べるように配慮しました。
- ✓ 各フレーズごとに音声ストリーミング用のQRコードが配置されています。

基本構成

第1部：ドイツ語技能検定試験5級から4級程度、またはCEFRのA1・2の語彙・文型・会話表現中心。

第2部：ドイツ語技能検定試験3級程度、またはCEFRのB1語彙・文型・会話表現中心。

音声（ネイティブスピーカーによる録音）

すべての例文を普通のスピードとゆっくりの2通りの速度で録音してあります。また例文に用いられた単語も全て録音されています。巻末付録「動詞の使い方」も例文がすべて収録されています。

ユニットの文章はできるだけ声を出して音読してください。音源は時間のあるときにいつでも聞き流し、リピート練習することをお勧めします。

略歴：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、
学術博士。慶應義塾大学、獨協大学、お茶の水女子大学非常
勤務講師。共著「ドイツ語発音発話徹底ガイド」など。
現在ドイツ語学院ハidelbergで独検対策クラス等を担任

